

《資料紹介》

石橋湛山学長学内関係資料（一九五二～一九六八年）

石橋湛山学長時代の刊行物における石橋学長の寄稿文を掲載いたします。

文學部 論叢

第 1 號

立 正 大 学 文 学 部

文学部論叢 第1号
(1953年11月30日発行)

創刊の辭

石 橋 湛 山

今回わが立正大学が創立五十周年を迎えるを機とし、文学部の教授および助教授の諸君が文学部論叢の創刊を企てられたことは私のまことに喜びにたえないところである。伝統をはこるわが文学部は、これによつて今後更に一層の光彩を加えることを疑わない。

私の乏しき経験に省みるに、学問ないし思想は、これを語ること、または文章にすることによつて鍛錬され、正確度を増すものである。頭の中では、たしかに知り尽し、考え尽したと信ずる問題でも、さてこれを口にし、あるいは筆にしてみると、その知識ないし思索の、いまだ、はなはだ足らざることを発見することが、きわめて多い。そこで、われわれはコトバがつまり、文章ならば苦吟する。コトバがつまり、文章に苦吟するのは、内に思想は充実しているが、これを表現する言語文学の発見に苦しむことでは、おそらくない。もちろん、さような場合も絶無とはいえないが、多くは内に思想の熟せざるものがあるからである。しかしこれは決して悲しむべきことではない。われわれは不断にかかる経験をし、はじめて自己をみがき、学問思想の向上発展を期しうるのである。

申すまでもなく教授および助教授等の諸君は常に教場において講義し、またその講義案を作ることによりて、前記の経験を日々夜々積まれているものと思う。しかし教場における講義と、広く識者に訴えんとする文章とで

創刊の辞

は、その間にまた自ら、これが制作に当たる心構えの異なるものがある。けだし諸君が、あえて、ここに文学部論叢を發刊し、遂次その研究の成果を發表せんとする理由の一は右にあると考える。言いかえれば、学問研究の一新道場を開くことである。幸いに本学に学長の職を受ける私として、これを喜ばずして、他に何をか喜びよう。

だが、こうは言うても、わが文学部論叢は、もとよりただ自己の学問の充実に満足してとどまる声聞的のものであるはずがない。わが立正大学は日蓮上人の流をくみ、立正安国を建学の主旨とする。安国とは独り日本一国だけでなく、世界人類の救済を意図するの心である。文学部の諸君がこの論叢を創刊する趣旨が、またここに存することは言をまたない。私はわが文学部に属するそれぞれの専門学科から、それぞれ雄大なる研究が續々本論叢に發表されることにより、自ら立正安国の趣旨が四海に貫徹せられる光景を想像し、心のはずむことを覚えるのである。言うまでもなく、学問の研究は必ずしもそのまま直ちに実用に供せられるものではない。また学問は常に道德的ないし宗教的目的をもつて研究されるものではない。しかし研究者の心構えが立正安国の趣旨に立脚するならば、その学問は、一見いかに宗教道德と縁の遠いものであつても、成果は自ら立正安国の目的にそのものである。水に心はなきも、自ら大地を潤し、生物を育成するがごときである。

私は学者または教師の職にある諸君が物質的に現在きわめて恵まれない地位にあることを知っている。これを向上することは、社会的必要事である。だが、そうだからとて私は、学者または教師諸君が常に創造の世界に住みうる喜びを忘れてはならないと思う。諸君は教場において常時人間を創造しているのである。また学問において、絶えず新たな人生の創造に従事しているのである。文学部論叢は、またその創造の道場である。以上いささか所懐を記して創刊の祝辞とするしだいである。

立正大学 文学部論叢 20

立正大学文学部

文学部論叢 第20号
(1964年12月25日発行)

故
ブリンクリー教授の遺徳を称える石
橋
湛
山

立正大学教授・東洋大学講師・英宝社会長J・R・ブリンクリー先生は明治二十年三月二十五日、親日家として知られた英国人フランク・ブリンクリー氏を父とし、水戸藩士の娘、田中安子氏を母として東京都港区芝高輪に誕生、小学校教育を暁星学校小学部において修め、更に中学校・高等学校の課程は英・独・仏の三カ国において修められ、最後は英国、ロンドン大学にあって歴史を専攻されました。

明治四十三年より大正三年に亘り、日本において英字新聞、ジャパン・メールに勤務し、その後、一旦、英国に帰り、陸軍将校として第一次大戦に従軍せられました。

大正九年、再び来日され、同十月、日本政府の陸海軍嘱託となり、国際連盟に勤務のため、ジュネーブ並びにパリに滞在、この間五カ年に及びました。

大正十四年、国際連盟を辞して英国に帰り、ロンドンの月刊紙デイリー・ヘラルドに勤務せられ、昭和四年、再度日本に來られて東京における各大学にあって英語・英文学を講ぜられました。

昭和十七年、第二次世界戦争のため英国に送還されることになりましたが、インドにおいて英国参謀少佐としての任務に着かれました。同二十一年七月三十日、戦後の日本において、連合軍最高指令部の命令により極東国際軍事裁判検

事団の翻譯課長として、同二十四年まで勤務せられました。

昭和二十三年四月二十八日、仏教の海外宣揚につとめた功により、天台宗より権僧正の僧階を授与せられ、その翌年七月、英国政府により日本において特別除隊する事を許されて軍務をはなれました。同年八月、日英文化交流を目的とする出版社、株式会社英宝社の創設に参加して初代社長となり、のちに取締役会長となりました。

この頃から、東都における仏教各大学並びに東洋大学・早稲田大学・横浜市立大学・東京商船大学等において英語・英文学を講ぜられました。特に仏教関係の各大学においては国際仏教研究所等の設立に尽力せられ、学生に対して極めて親切に教授されました。

教員室においては同僚の教授各位に対しても距てなくおつき合いになられ、同好の士と共に日本画の稽古などもなされました。また立正大学発行の学術雑誌等にも興味ある論文を発表せられ、先生の高風は教授・学生一同の敬慕の的でありました。

立正大学教授となられてから、先生が自ら進んでとられたお仕事は仏教の英語による表現でありました。仏教用語の英語訳はこの仕事の一つであったのであります。このことにおいて先生は今の日本においては最適任者の一人であったと信じます。

この先生が授業の途中で病に倒れ、八月二十一日午前八時十七分、享年七十八歳にして遂に逝去されましたことは洵に哀悼の極みであります。御逝去にあたり、天台宗より僧正の位を贈られましたことは、私達の些か心慰めるところであります。

先生の颯爽たる英姿を再び仰ぐことは出来ませんが、先生が日本に残された大きな影響は決して消えることなく、私達の心の中に生きつづけてゆくことと信じます。

ここに些か蕪辞を述べて謹んで弔辞といたします。



立正大学入学案内 1953



理想の大学

まひちあき
石橋 湛山

日本はいまだ敗戦の痛手をうけ完全にいえ切っていない。しかし前途には大いなる光明が輝いている。

第一に日本民族は世界においても最もすぐれた民族の一つである。この事は日本の歴史が証明する。第二に日本は国土こそ狭いが、まだぐ開拓すべき資源に乏しくない。

第三に日本は世界の大宝庫たる東亜に位置している。われ／＼は近き将来、この大地域の諸民族と手をたずさえて右の宝庫を開き、世界の福祉に貢献すべき運命を荷っている。

問題はたゞわれ／＼が自らのこの素質と環境とを、いかに自覚し生かすかである。われ日本の柱とならん、われ日本の眼目とならん、われ日本の大船とならんと誓われた日蓮聖人の精神を建学の

本旨とするわが大学は、まさに以上の使命を果たすべき日本青年を造成する道場でなければならぬ。

本大学の設備は善美とは言えない。だが教育に大切な事は設備でなくして精神である。古来の偉人は善美の殿堂から生まれていない。私は本大学の学長として、もちろん設備の充実に無関心ではない。しかしそれ以上に私は教授諸君と学生諸君との協力により、本大学を精神的に理想の大学たらしめんと願うものである。



立正大学（入学案内） 1956

理想の大学

立正大学長 石橋湛山



日本の前途には大いなる光明が輝いている。その理由は凡そ三つある。

第一に日本民族は世界において最もすぐれた民族の一である。この事は日本の歴史が証明する。第二に日本は国土こそ狭いが、まだまだ開拓すべき資源に乏しくない。第三に日本は世界の大宝庫たる東亜に位置している。われわれは近き将来、この大地域の諸民族と手をたずさえてその宝庫を開き、世界の福祉に貢献すべき運命を荷っている。

問題はただわれわれが自らこの素質と環境とを、いかに自覚し生かすかである。われ日本の柱とならん、われ日本の眼目とならん、われ日本の大船とならんと誓われた日蓮聖人の精神を建学の主旨とするわが大学は、まさに以上の使命を果たすべき日本青年を造成する道場でなければならぬ。

本大学の設備は善美とは言えない。だが教育に大切な事は設備でなくして精神である。古来の偉人は善美の殿堂から生れていない。私は本大学の学長として、もちろん設備の充実に無関心ではない。しかしそれ以上に私は教授諸君と学生諸君との協力により、本大学を精神的に理想の大学たらしめんと願うものである。

Rissho

UNIVERSITY



立正大学

1959

立正大学（入学案内）
1959



学長

石橋湛山

大学の理想

大学は學術を研究指導するとともに社会に役立つ立派な人格をつくる場所でなければならない。

それには、

充実せる研究施設

優秀なる教授陣容

教授と学生との緊密なる接触

という根本的条件が満たされなければならない。現下のマスプロ的教育においては、絶対にその使命を完うすることはできない。また実社会は単なる肩書やハッタリで押通せるものではなく、すべてその実力にかかっている。

本学は過去55年に亘って、かゝる理想の達成に傾倒し、施設の向上、学界の權威、有能なる新進教授の増強、およびこれに対応する学生の維持につとめてきた。その成果は各界に活躍する同窓の輝かしい業績に明かである。

本学に学ぶ若き学徒は、いたずらに虚位、空名にとらわれることなく、よくその実をとり、ひたすら次代を建設する意気と熱情とをもって広く社会に貢献すべく進路を求めなければならない。

1960

RISSHO
UNIVERSITY

立正大学

立正大学（入学案内）
1960



学長

石橋 湛 山

大 学 の 理 想

大学は学術研究指導とともに社会に役立つ立派な人格をつくる場所でなければならない。それには、充実せる研究施設、優秀なる教授陣容、教授と学生との緊密なる接触という根本的条件が満されなければならない。いわゆるマスプロ的教育においては、絶対にその使命を完うすることはできない。また実社会は単なる肩書や見かけで押通せるものではなく、すべてその実力にかゝっている。本学は過去56年に亘って、かゝる理想の達成に努力し、施設の向上、学界の権威、有能なる新進教授の増強、およびこれに対応する学生の維持につとめてきた。今やその成果は各界に活躍する同窓の輝かしい業績に明かである。

本学に学ぶ若き学徒は、いたずらに虚位、空名にとらわれることなく、よくその実をとり、ひたすら次代を建設する意気と熱情とをもち、広く社会に貢献すべく自らの途を開かなければならない。

立正大学

R i s s h ō U n i v e r s i t y

1961

立正大学（入学案内）1961



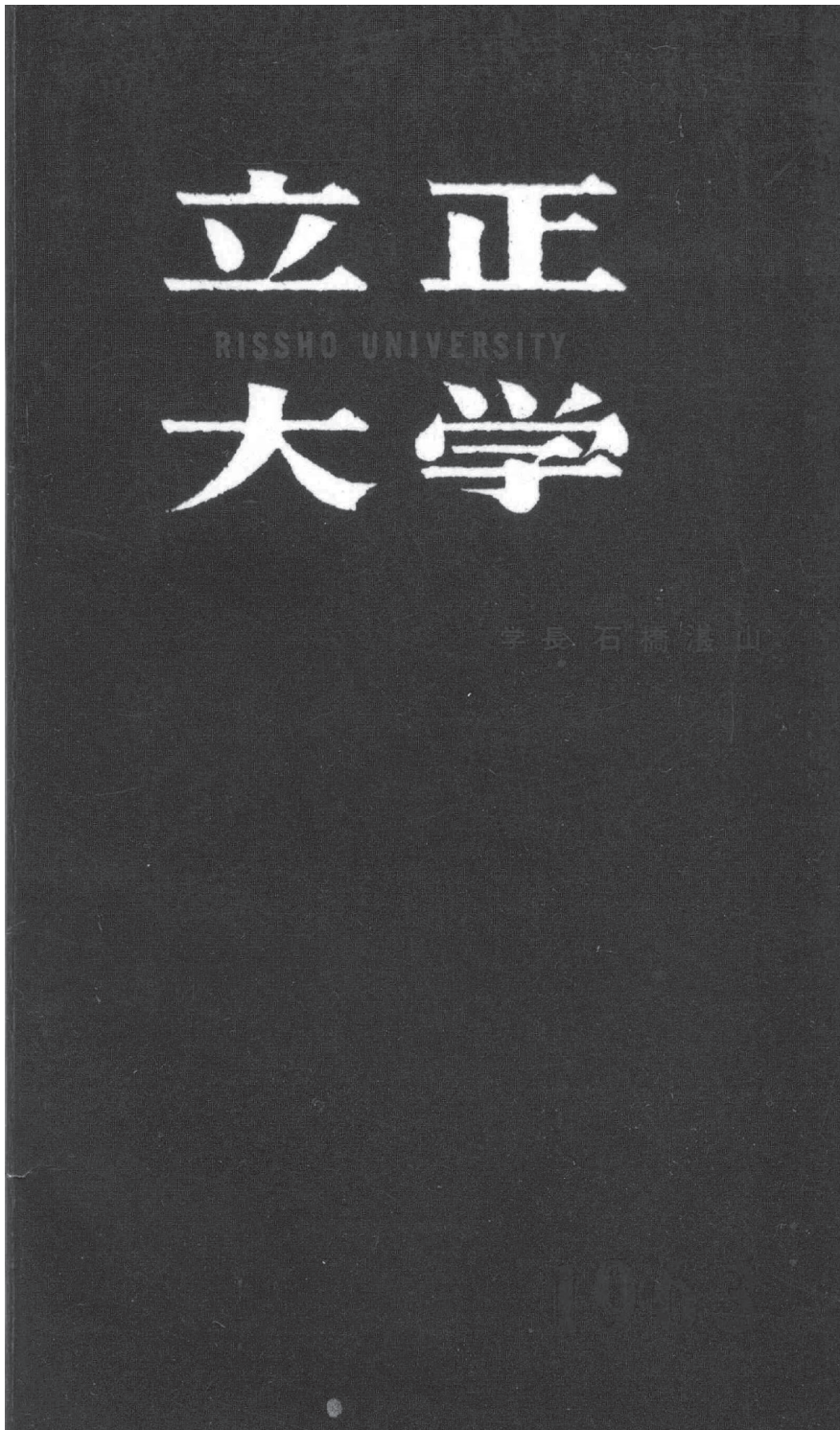
大学の理想

学
長

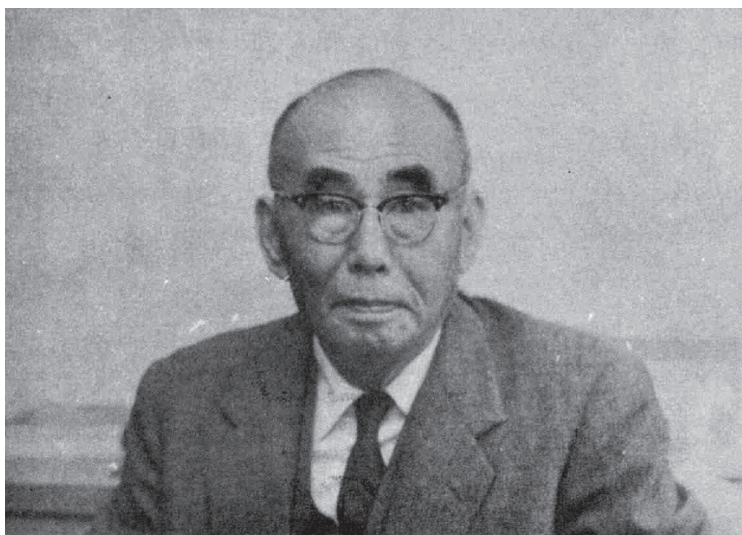
石橋
湛山

大学は学術研究指導とともに社会に役立つ立派な人格をつくることでなければならぬ。それには、充実せる研究施設、優秀なる教授陣容、教授と学生との緊密なる接触という根本的条件が満されなければならない。いわゆるマスプロ的教育においては、絶対にその使命を完うすることはできない。また実社会は単なる肩書や見かけで押通せるものではなく、すべてその実力にかかっている。本学は過去六〇年に亘って、かゝる理想の達成に努力し、施設の向上、学界の権威、有能なる新進教授の増強、およびこれに対応する学生の維持につとめてきた。今やその成果は各界に活躍する同窓の輝かしい業績に明かである。

本学に学ぶ若き学徒は、いたずらに虚位、空名にとらわれることなく、よくその実をとり、ひたすら次代を建設する意気と熱情とをもって、広く社会に貢献すべく自らの途を開かなければならない。



立正大学（入学案内）1963



おおらかな人物を

学 長 石 橋 湛 山

人間の価値は、その人の知識の量だけではかれるものではない。知識を駆使し、これを有意義に利用する力が必要ならば、世の中に処し、且つ社会の為になることはできない。正しい知識をもったうえに、確固たる意志と、ものごとに対する熱意と誠実、そしてその上にたゆまぬ努力を続けうるような人こそ、社会有為の人物というべきである。つまり人間が出来ていなければ、知識は時としてかえって、さまたげになる場合さえある。

教育はこうした社会有為の人物を、養成するのが目的であるべきだが、わが国近来の教育は、あまりにも知識のみを偏重する傾向にある。もっともこれは、今にはじまったことではなくて、明治以来わが国が、所謂後進国

たりし頃、先進国に追いつきたいあまり、外来文化の吸収に急であったため、何よりも新しい知識の追求に、あけてくれた時代からの弊風である。

日本は第二次大戦に敗戦の憂き目を見たが、戦後僅かな年月の間に、復興の偉業を進め、その経済成長は驚くべきものがあり、世界の眼を驚かせている。これこそ、国民の底力というべきことである。

さりながら世界の国々は、どこでも自国の繁栄と幸福のために、あらゆる努力をしているので、その競争は激甚であって、日本の今日の繁栄が、安易に永続するとは思えない。ここでこそ国民は一層の努力をして、いつまでも平和な、繁栄の日本を築く努力を、続けなければならない。それは一にかかって、日本の経済、文化を支える人物の養成にある。

ところが、教育の面ではその普及と高度化は、まことに結構なことであるが、最近再び知識偏重の時代に逆もどりした感がある。大学はその入学者の選抜方法を、知識の量によってのみはかる、苛酷な入学試験を行なうため、高校教育はいきおい入学試験準備に急で、全人教育を行なう余地がなくなっている。大学がもし同じような知識教授だけをして、能事終れりとなすならば、次代の日本国民は一体どうなるだろう。

私は立正大学の教育は、このような弊風に陥入りたくない。入学者の選抜も独自の方法を取り、入学後の教育も、師弟一如となって研鑽し、新しい学問への情熱は、勿論必要だが、人間として、社会に対し本当に役に立つ人物、「おおらかな人物」を養成することが、極めて大事な点であるとする。

立正大学に入学を志す青年諸君も、よく本学の教育精神を理解し、その覚悟で入学して欲しいと思う。



立正大学報 第4巻第3号 1960

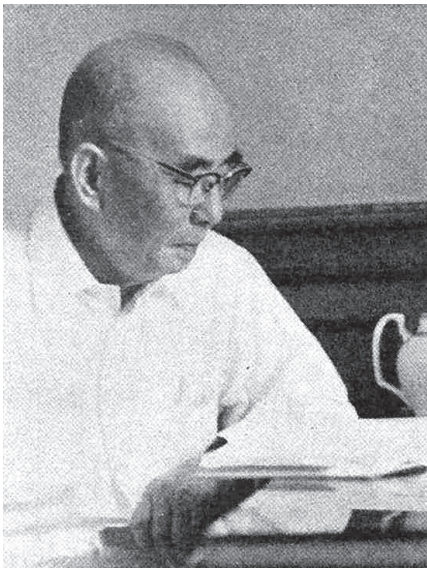
思うて学ばざれば即ち危し

石橋 湛山

一月十六日朝安保条約改訂調印のため米国に出発せんとする岸首相一行に対し、全学連所属の学生が取った行動はひどかった。これにはさすが青年に対して寛大な一般世論も、極く一部の者を除いて、一斉に非難した。いつかもうた通り、青年には多少常規を逸するぐらいの活気があることを要する。何でも規則に従い、従順でありさえすれば良しとは云えぬ。安保改訂には種々議論も存するところで、これに反対する意見もなかなか多い。一部の学生が、この反対意見に同調し、その結果か極端に走り、実力をもつてこれを阻止せんと企てたことも、気持としては全然理解出来ないではない。戦時中特攻隊として多数の青年が死に赴いたのも同じ気持であつたろう。その行為の善悪についての批判はしばらくおいて、率先社会公共に尽さんとする、犠牲の精神はここに認めることが出来る。全学連の学生も、羽田空港に於ける、あの挙によつて実際に安保条約の改訂を止めえるとは考えていなかったであらう。又かの行動が、乱暴すぎるものであつたことも認めていたであらう。けれどもいわば、騎虎の勢で、あそこまで

突走つたことは一応許してやつてもよい。けれども総て物には限度がある。若い者の過激の言動を大目に見る世のならわしがあるからとて、野放ずに社会の秩序を無視することは、世間が許さない。論語に「学んで思わざれば、則ち暗し。思うて、学ばざれば、則ち危し。」とあるが、深く味うべき言葉である。

右と同時に、近頃の大学の先生や一部の進歩的と自称する人達の責任も重大であることをこの際言わねばならぬ。彼等は若い者の人気をえんとして、迎合的に青年の無思慮の行動をおだてるような態度をとる。それがどれほど青年を毒しているかわからない。切に反省を要望してやまない。



会 報

1 9 6 4

NO. 1

立 正 大 学 父 兄 会

父兄会々報 創刊号

父兄会の発足によせて

立正大学々長 石 橋 湛 山

このたび、本学々生の父兄の方々が発起せられて、本学にも父兄会が結成せられたことは、私の喜びとするところであります。

発起人会の席上でも、申したとおり「むしろ、おそきにすぎた」というのが私の実感であります。

近来、わが国の経済的發展には、すばらしいものがあります。まさに所得倍増であります。しかしそれと同時に、犯罪や災厄（交通事故等をふくめて）の増加も、見逃すことのできぬ事実であります。所得が二倍になっても、犯罪や災厄が三倍四倍と増加したのでは、人間の幸福が増大したといえるでしょうか。



ここで、人間の質ということが問題となるのであります。大

学は、単なる知識人を作るところではなく、豊かな教養人を育成する場であるというのが、わが立正大学の基本方針であります。これは、「建学の精神」が明示しているところであります。

このような教育のためには、父兄、またはこれに準ずる方々の協力が、是非必要であります。父兄会の発足が「おそきにすぎた」といったのは、このためであります。

父兄会の予算案をみると、何一つとして、学生の福祉、厚生を目的としないものはありません。すべては、愛する学生のためであります。父兄会の発展を望む所以であります。

昭和三十八年度卒業式告辞

敢然とした気骨を持って

学 長 石 橋 湛 山

本日はご卒業おめでとうございます。本学も卒業生がふえ、二回にわけて卒業式を行なっている次第であります。だが、学校の価値は必ずしも人数ではない。私の理想をいえば、人数はもうふえない方がよい。ともかく皆さんが卒業せられ、これから世に出るといふことは、誠におめでとうございます。

そこで私の気のついたことを申し述べたいと思います。ある逸話がありますから簡単に述べたいと思います。

昨年四月、中国へ行ってきました。その折に、中国で鑑真和尚の千何百年かの祭がありました。その時、かなりの老人が多勢集っておりましたが、その中に八十幾つという大変な老人がおりまして、何をいうかと思っただけに米国の帝国主義をいうのです。彼らは一體、帝国主義がどういふものか知っているとでもいうのでしょうか。私は不思議に思う次第ですが、それを打ち破らなくてはいいないとしきりに攻撃する。中国に行っている日本人が殆んど口をそろえたように中国人のまねをして、米国の帝国主義を攻撃する。

悲しいが、日本の政府の攻撃をやる。何しに外国までも行って日本の攻撃をするのか。

日本と、とにかく今日関係のある米国の攻撃をする。それは中国人に、簡単な言葉でいうとオベッカをつかっているのだ。彼らは外国の空気に支配され、外国にうけがよいと思つて口真似をしている。そんなことではいけない。日本にとって、なんて情ない連中だろう。それは日本人の癖でありますが、そういうことがないように気をつけて下さい。

日蓮聖人の特色の一つは迎合しないことであります。日蓮聖人が敢然として、常に自分の主張で南無妙法蓮華經を唱えたこと、そして日蓮聖人は非常な気骨のある人であると云えよう。人のいうことにはまきこまれない、気骨を皆さんは学んで欲しいと思います。このような迎合主義の時代には、自分の信ずるところによって行なうことです。むずかしいことですが、人がなんといおうと左右されない覚悟をどうかもって頂きたい。皆さんにも日本人全体にも要求したいのですが、この大学を卒業したものは先にたつて自分の信ずるところをより考えて、どうか日本の模範となつていただきたい。

(この欄は新聞会の御協力に依るもの)

昭和三十一年度入学式告辞

誇りを持った学生に

学 長 石 橋 湛 山

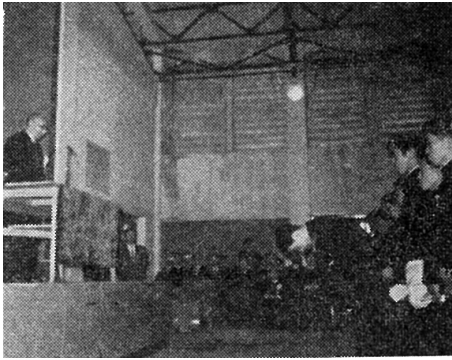
新人生諸君、おめでとうございます。

すべて、この新しく出発するというのは、愉快なことで、諸君もこの学校に入って、今からこの学校の新しい生活に新しくつかれるということば、非常に愉快に感ぜられると思う。だから、今日入学した日から、計画を立てて、一日もたゆまず勉強するということばです。この事を是非実行して下さい。

それには本を読む事です。毎日一ページなら、一ページ読む。そして、それは必ずやる。一日に一〇ページ、二〇ページというようなことだとむずかしくなる。実行可能な範囲に於て、自分の力に応じた能率的な計画のもとに、必ず実行して行けば、一年で三百六十五ページとなる。

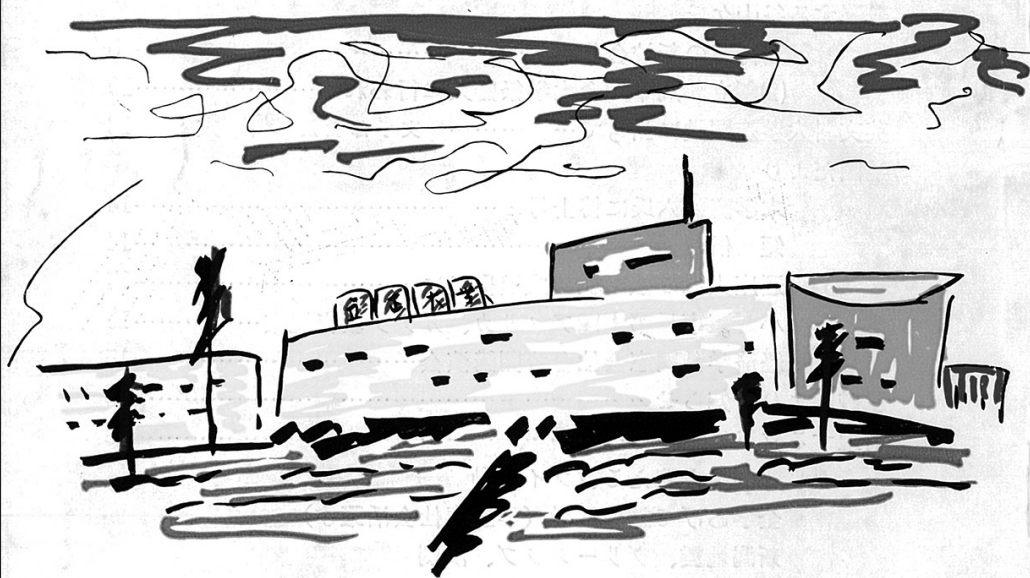
同時に、精神面に於ては自分というものを常に堅持して、人にいわれたからといって、やろうとするとだめです。自分の信ずるところを恐がると、結局人につけ入られることがある。どうも日本人の悪いくせは、とかく雷同しがちである。そして自分に深い信念がないにもかかわらず、つい人のいうことにおだてられて、盲動することなのです。

どうか、立正大学の学生は学生としての誇りを持ち、自分の信念に基づいて行動して欲しい。間違っていると、間違っていないということは、二の次にして、とにかく自分を堅持することに努力して欲しい。



父兄会報

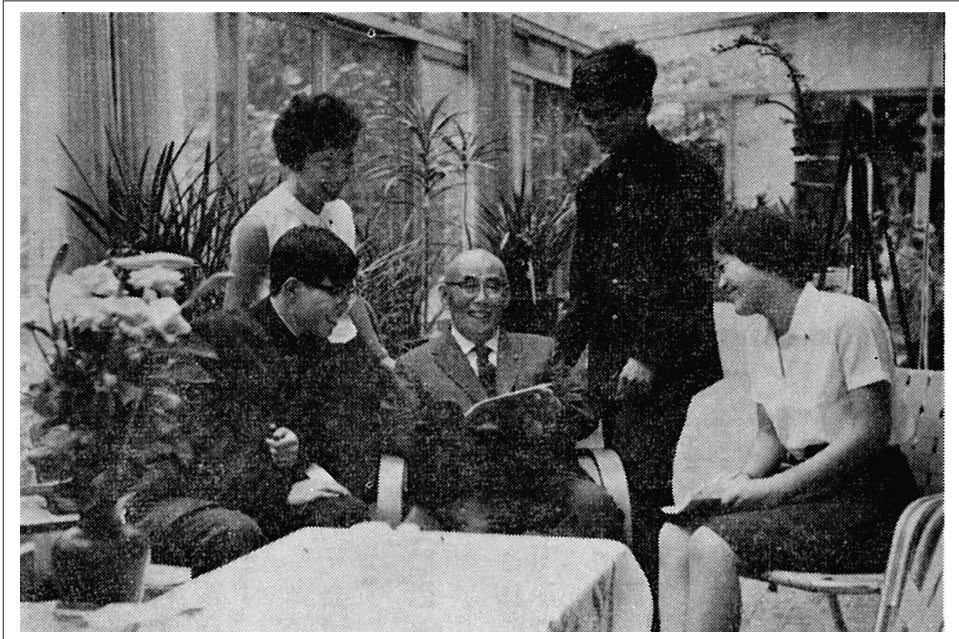
NO.2



立正大学父兄会

父兄会々報 第2号

学長のことば



父兄会々報が第二号を発行することになり御挨拶を申しあげる機会を得たことは、私の喜びとするところであります。

先づ昭和四十年の年頭にあたり、会員各位が、目出度く新春を迎えられたことと存じ謹んで祝意を表します。

今日の日本が、もっとも必要としているものは、人材であります。勝れた人格と識見をもち勤勉にして仕事に興味をもち、どのような困難にも挫折しないような人物は、しかし、容易に作られるものではありません。どうしても、学園の教職員と学生の父兄の方々との協力がなければ、右のような目的は達成されません。

父兄の方々が、父兄会を結成されたのもこのためであろうと存じます。

どうぞ所期の目的を達成するために一段の努力をお願いしたいと存じます。

学長 石橋湛山

会報

NO. 3



立正大学父兄会

父兄会々報 第3号



学長挨拶

石橋湛山

このたび、本学父兄会の機関誌会報の第三号が発行されることになり、挨拶を述べる機会を与えられましたことは、私の欣快とするところであります。

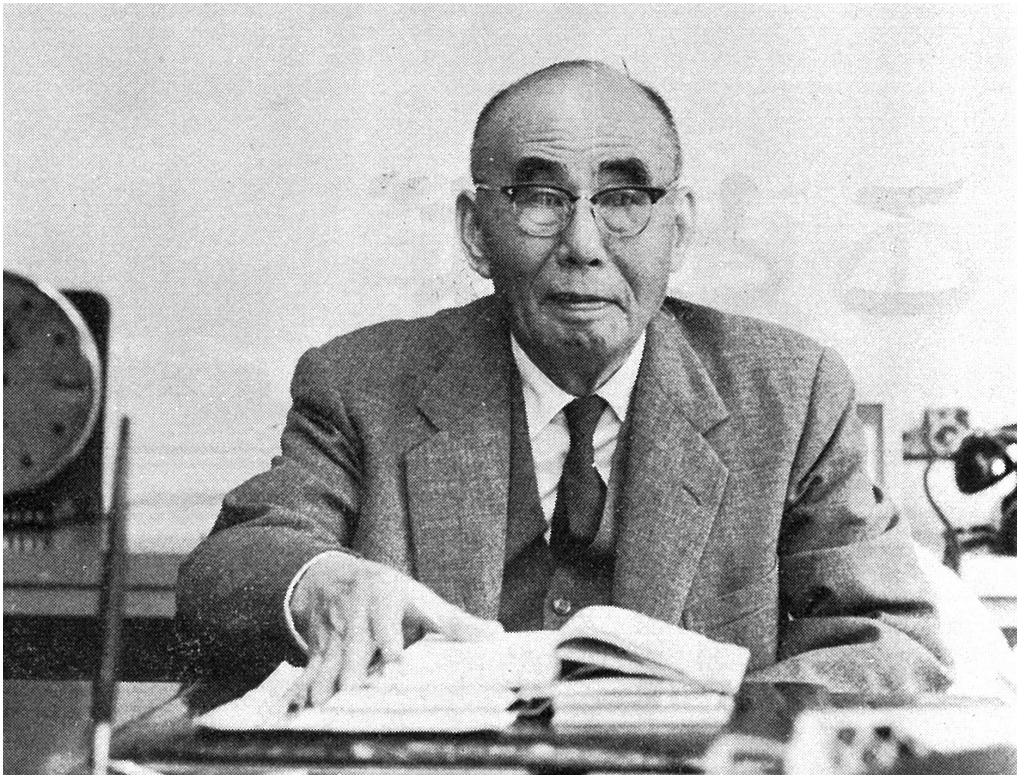
今年の四月二十四日に開催せられました本会の総会においても述べましたように、今日の我国の大学教育の欠陥は、知識の教育が先行してしまつて、人格の陶冶、すなわち、道徳の教育が軽視されていることであると思ひます。

私は、早くからこの事に注意して、本学においては、知識の教育とともに、道徳の教育を重んずべきことを主張してきました。これは、本学の「建学の精神」に明らかなところであります。

こうすることによって、はじめて、単なる知識人ではなく、大事を托することのできる人材を育成することができると確信いたします。父兄の方々の理解と協力を切望するのは、このためであります。



父兄会々報 第4号



学長

年頭の挨拶 石橋湛山

新年おめでとうございます。

父兄会の会報第四号が発行されるに当り、挨拶を述べる機会を得ましたことは、私の欣快とするところであります。

今日まで、いろいろの機会において述べてきましたように、現代日本の教育の欠陥は、小学校からはじまって、上級の学校へ進む場合、すべてが、入学試験によって左右されていることです。ことに、大学への入試となりますと、ただ一回で、可否の決定がなされます。不運の者は、あたら勝れた素質をもちながら、競争の落伍者となってしまうのです。このような不合理なことはありません。私は、教育上の所見によって、数年前から推薦入学制度を提唱してきました。これが、昨年八月下旬、九月上旬に東京で開催せられた国際大学協会総会の影響もあつたか、我國の識者によって認識されるようになりましたことは、同慶の至りであります。我が立正大学は単なる知識人というよりも、国家や民族の運命を担うべき人材の育成に意を注いでいます。父兄各位の理解と協力を望む次第であります。

(7)

小野光洋師の逝去を悼む

学長 石 橋 湛 山

本大学々園理事長、小野光洋師には、去る十一月十九日午前三時五分、宿痼腸ガンのために逝去せられた。痛恨のきわみである。

師が、本学理事長に就任せられたのは、去る昭和三十八年のことであった。

その頃の本学は、いろいろの難問題をかかえていたが、師は、これらの問題を美事に処理して、今日の隆盛の基礎を固めた。

これは、師を扶けた常務理事諸君をはじめ、各先生方の協力によることは勿論であるが、師の学識と経験がなければ、みることのできない結果である。

今や師はこの世を去られた。しかし、残された諸先生には、一致協力して、師の素志の貫徹に邁進せられるよう希望する。

これが、今は亡き師に対するこの上なき供養であるからである。



大学祭プロフィール

四十年大学祭が去る十一月四日から八日迄開催された。石橋学長は大学祭によせて次の言葉を示された。

「科学技術の発展により、地球上の各地域の交流が頻繁になっただけでなく、他の星との交流も可能になってきたので、地上に住む人間の一体感が濃くなり、人類という言葉も民族や国家という言葉と同じように、きわめて具体的な内容をもつようになってきている。したがって我々も狭い孤立した民族観や国家観から脱け出して広い視野から各種の問題を検討する必要がある……大学という所は研究と教育と学友の場である。それは世界の問題を自分のものとして受けとる人材を養成する場であるからである。そして大学祭はこれら内外の研究成果を見聞する機会である」と。

今年も又学舎工事中に大学祭が行われた。発展につぐ発展で絶えて久しく工事の音のない日がなかった立正大学に学祭中はその音も止り、立正の学生、他大学の学生、一般の人そしてOB、OG、教職員が一体となりこの学祭は成果をおさめた。

本年度の参加団体は実に百を数えた。開会式に於る各



団体の行進は誠に頼もしいものがあり、四、五年以前の規模からはるかに秀でるものが感じられる。

慣例の自動車パレード、仮装大会、ファイヤーストーム。そのどれもが毎年新しいメンバーを加えて盛大に立正カラーを育てていくのはいかにも頼もしい限りである。

増していく校舎に追いかけて各種団体が出現していく現況は過去に於ては見られない現象でもあろう。

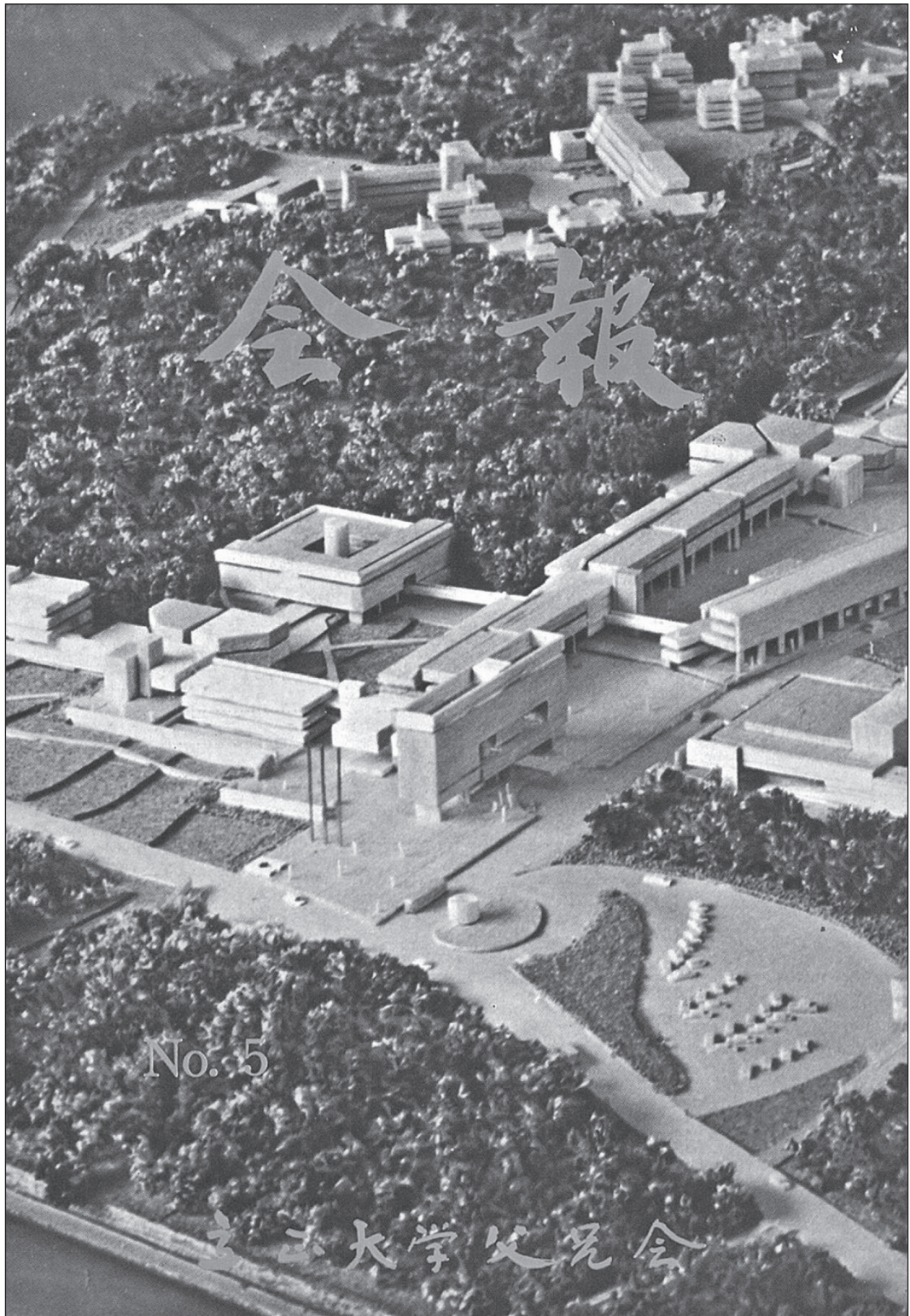
来校したOBに聞いて見た。今年の大学祭をどう感じるかと。

「立派になりました。うらやましいです。でも祭りという気分が感じないのは、良いか悪いか解りませんが、なにか展示大会という感じですね」

そういえば数年前より学祭期間中の飲酒は禁止になった。

祭りをどう定義づけるかは、この文の目的ではないが、OB氏の発言も解る様な気もする。

今年の特徴付をするならば、校庭に舞台が出来たことだろう。舞台のアピール力は強いものがある。よい着目といえないこともない反面、雨でも降ったらどの様に対処したかとも考えられる。



父兄会々報 第5号



新入生諸君を迎えて

石橋湛山

このたび、本大学へ入学を許可せられた諸君は、今や、わが国の教育制度における最高の段階にまで到達したのであります。諸君と同じ年輩の人々が、健康上、経済上、その他の理由によつて、中学或は高校卒の学歴で、社会人とならなければならなかつたのに対して、諸君は幸運であつたと思わなければなりません。これは主として、父兄の、親類縁者の方々の限り無い慈愛のたまものであることを認識すべきであります。そして進んでこれらの人々の期待にもそうよう努力すべきであります。さらに、諸君のように進学の機会に恵まれなかつた人々に対しても、諸君は責任を感じて、自分の行動を慎重にすべきではないでしょうか。

大学は、学問研究と教育とを結合の紐帯とする機能社会であります。この機能を充分に果たすために、私たちは、一つの規約をもつています。これが学則であります。学則を守ることは他から束縛されることではなくて、自分の内心からの要求に従うものと考えるべきであります。かくして、はじめてその名に価する大学生活が約束せられると思ひます。諸君の大学生活がみのり多きものであることを念じています。

報 会

No. 7

立正大学父兄会

父兄会々報 第7号



教育の理解とご協力を

わが学園の発展とともに、父兄会の運営もいよいよ活発になってきましたことは、まことに同慶に堪えません。

ことに父兄会の学園に対するご協力や、学生の研究ならびに課外活動などに対する援助については、深く感謝してやまないところであります。

大学においても、学園と父兄との連絡が必要であります。常に父兄の方が、学園の教育方針や方法などをよく理解して、これに協力していただいてこそ、よき教育効果をあげることができま

す。わが立正大学は、立正精神を根幹として、学術の研究と人格の形成に、力を注いでいます。そしてすぐれた識見、円満な人格を持ち、勤勉にして実行力のある人物の育成を、念願しているのであります。

この実現には、ただ学園の努力だけでなく、父兄方の協力と援助がなければ、達成がむずかしいのであります。今後とも連絡を緊密にして、理解を深めるとともに、一そうのご協力をお願いします。

立正大学長 石橋湛山





年度末に際して

多事多端であつた昭和四十二年度も、大部分の学事を滞りなく終り、ただ卒業式を余すのみとなりました。来る三月二十五日には、千有余人の若人が、学成つて無事学園を巣立つことになつております。まことにおめでたい限りであります。これも偏に父兄各位のご協力に依るものと感謝に堪えません。

学園の発展にともなつて、父兄会の活動も活発を加えるのを見て、意を強くするとともに、敬意を表する次第であります。先ずありがたく思うことは、地方懇談会の催しが各地で行われて、大学と父兄との連絡が密接にとられていることであります。このことは大学教育においても、最も必要なことで、父兄に教育の実態を理解していただき、また父兄の意見も聞いてこそ、教育の大きな成果をあげることができます。

ことに父兄会から、学園の経費では手の届かない設備や施設などを、つきつぎに援助していただき、教育上大いに役立っているのがあります。なおまた学生たちの課外活動についても、父兄会の多大な補助を受けております。そして学生たちは、正規の教育のほか、豊かな知識・技能・情操などを会得し、より意義ある大学生活を送っています。

これらの点について、学園は父兄会に対して、深甚の敬意と感謝をもつて、お礼を申し上げます。なお併せて、父兄会の一層の躍進をお祈りいたします。

石橋湛山

体育会誌

1963
創刊号

立正大学体育会

体育会会誌
創刊号
1963



若きスポーツマンの

フェアプレーなる

精神の場として

諸君が、貴重な青春時代を大学生として過ごす目的は何であるか。

いうまでもなく、文化の進展に寄与できるような立派な人材となるためであろう。

このような人材は、健康な身体と、健全なる精神の持主でなければならぬ。

本学の建学の精神も、この考え方が基調となっている。

スポーツは、単に肉体の鍛錬であるばかりでなく、精神の鍛錬である。ここでは、絶えざる努力の集中とフェアプレイの精神が要求される。

スポーツ青年は美しい。明朗である。

このような学生諸君が、更に自分の経験を語り、理想を表明する「場」として、会誌を発刊することである。どうか、すこやかに発展するよう祈ってやまない。

所懐の一端を述べて祝辞とする。

立正大学々長

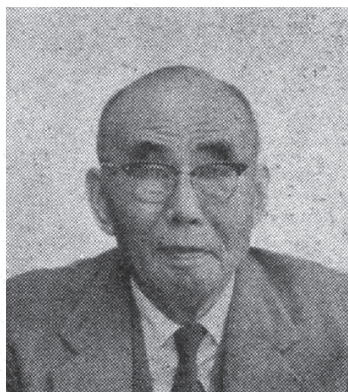
石橋 湛山

体育会誌

'66 | No. 4

立正大学体育会本部

体育会会誌
第4号
1966



体育会誌第四号の

発行を祝して

もに、後世にも伝えるものでなければならぬ。第四号が発行せられるにあたり、一言する次第である。

昭和四十一年十一月十日

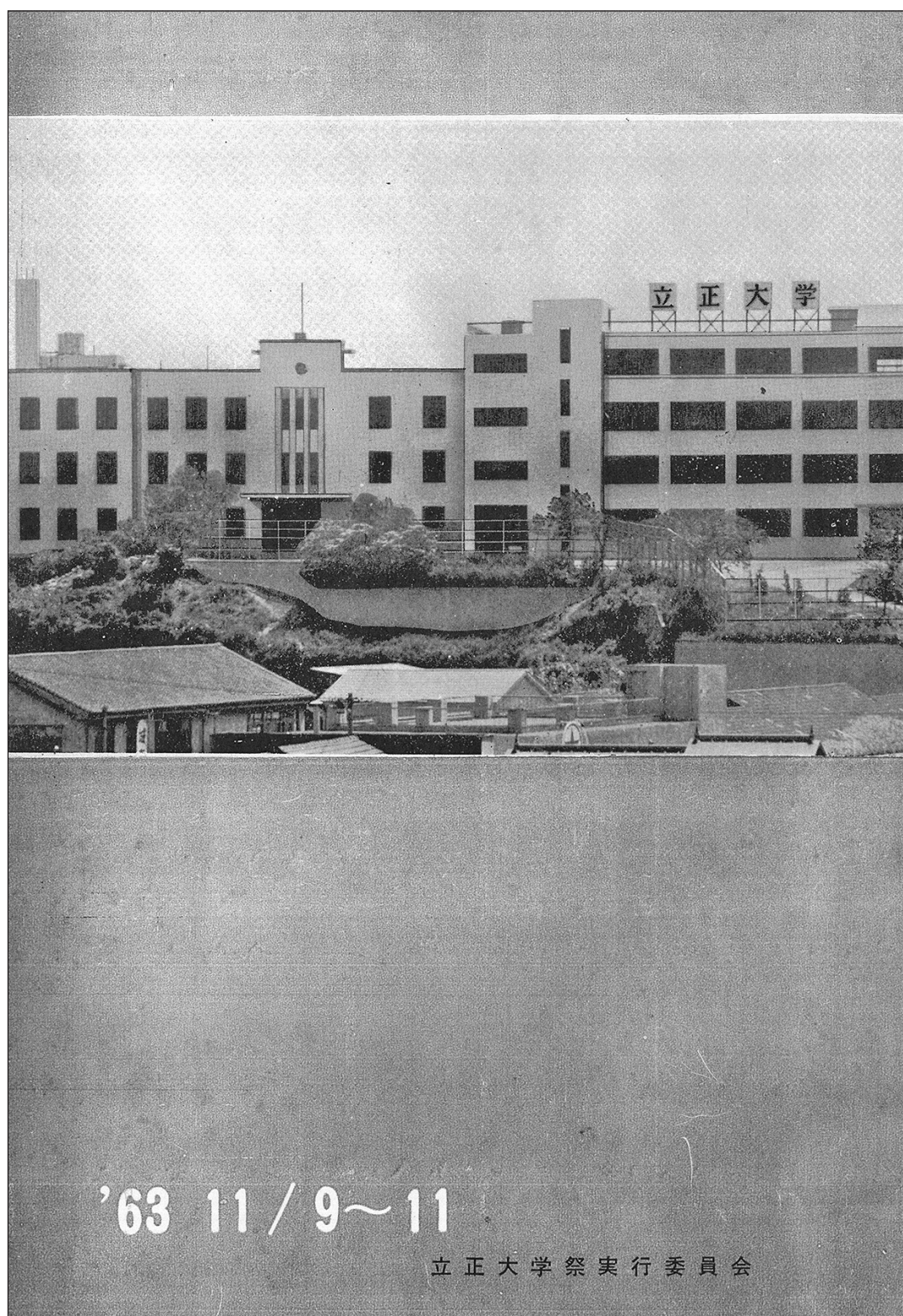
教育は、知育、徳育、体育という三本の柱によって支えられていることはいくまでもない。ところが、近來の教育を見ると、知育のみが先行してしまつて、徳育や体育が、はるかにおくれてしまった。これでは、完全な人格教育ということとはできない。

そこで、私は、立正大学は、知育は勿論あるが、それと平行して徳育と体育を尊重しなければならぬと思う。熊谷校舎に広い校地を持ち、充分な体育施設をしたのは、そのあらわれである。どのように立派な施設ができて、活用する学生がないならば、それは無きに等しいものといわねばならぬ。学生諸君が、これを充分に活用して、大学生活をみのり多いものとせられるよう希望する。

体育会誌は、その記録を収録して、広く世に知らしめると

立正大学学長

石橋湛山



立正大学祭
1963



大学祭によせて

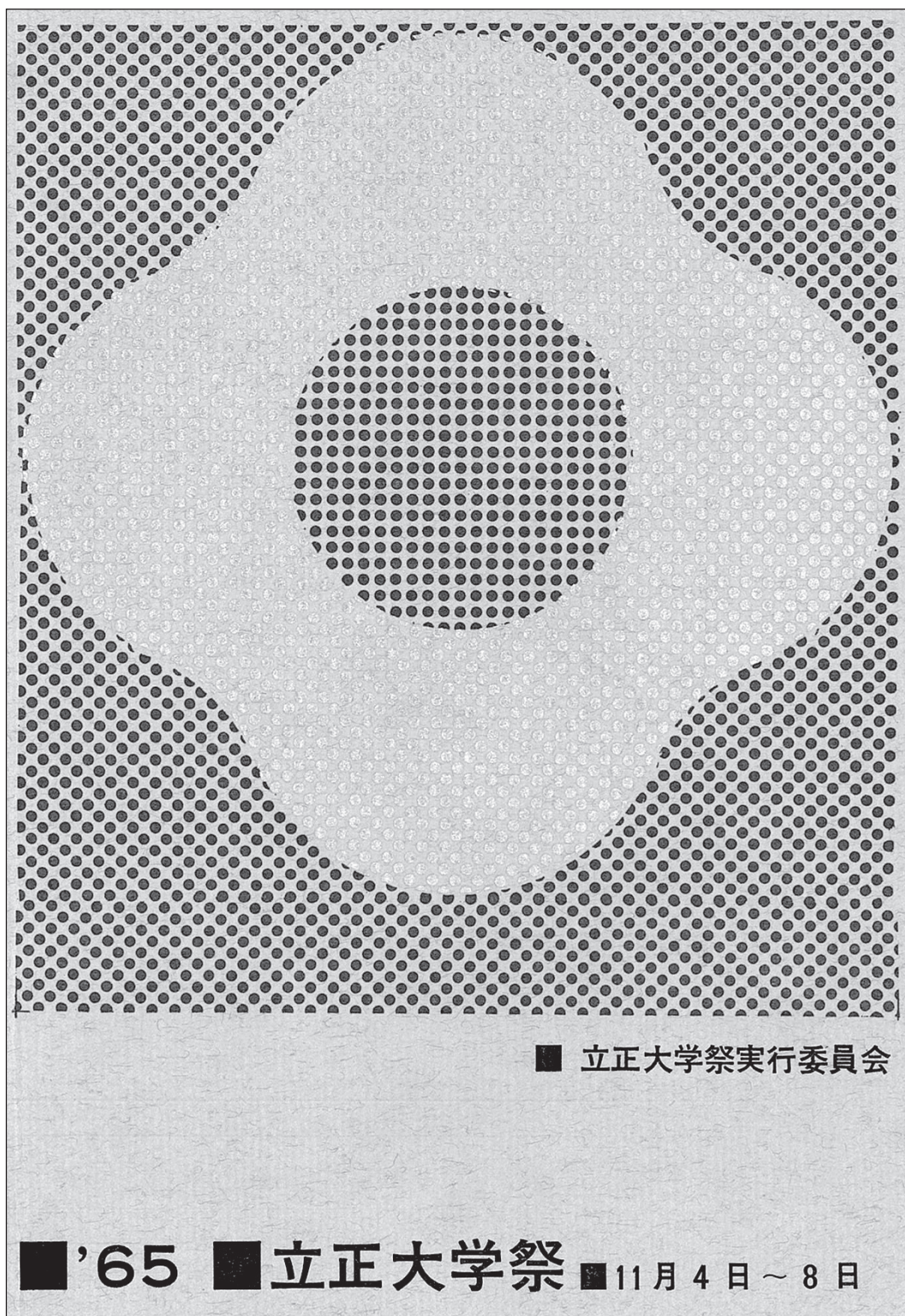
立正大学学長 石 橋 堪 山

近代における大学というものの社会的機能は、三つに分けて考えることが出来ると思う。第一が研究、第二が教育第三が交友である。わが立正大学においては三学部の専門分野において世界的水準を抜く研究がなされていることは私の喜びとするところである。教育においても同様である。

第三の交友というのは学園生活において、色々と境遇、身分、その他自分とはちがった人々と友達になることである。

大学祭はこのような交友を増進する絶好の機会である。この機会に学生諸君は平常学習していることがらの一編を展示会その他を通して、たがいに交換するとともに、楽しく愉快に、いわゆる大学生生活をエンジョイせられるよう希望する。

<写真は北京訪問の際羽田国際空港貴賓室にて>



大学祭によせて

立正大学学長 石橋 湛 山

科学技術の目覚ましい発展によって、地球上の各地域の交流が頻繁になっただけでなく、他の星との交流も可能になってきたので、地上に住む人間の一体感が濃くなり、これまでは抽象的にしか考えられなかった人類という言葉も、民族や国家という言葉と同じように、きわめて具体的な内容をもつようになってきている。人間は平等であるとか世界の平和とかいうことが単なる理念にとどまっているのではなく、いよいよその実現の段階に入ろうとしているとみてよい。したがって我々も、狭い孤立した民族観や国家観から脱け出して広い視野から各種の問題を検討しな※



※おしてみるのでもなければ、時代の進展にとり残されてしまうことになる。

これは、昨年の大学祭の際に、述べておいた私の感想の一節である。ところが今日の時点に立ってみると世界の状況は、全く異った方向へ進んでしまっている

ように思う。ベトナム戦争の長期がシンガポールの分離にともなうマレーシアとインドネシアとの争い、カシミールをめぐるインド、パキスタンの戦争等々。世界は大きな激動期に突入したように思われる。

この中において真理を探究し、文化の進展に寄与すべき学生諸君の責任は一層重大となってきたといわざるを得ない。

真実、正義、和平という言葉に示されている建学精神に導かれている本学の学生諸君は、ここに一步退いて深く考えるところがなくてはならぬと思う。

大学という所は研究と教育と学友の場である。それは世界の問題を自分のものとして受けとる人材を養成する場であるからである。

大学祭は平常の研究を発表する機会であり他の部門に属する研究の成果を見聞する機会でもある。

この機会を十分に生かして貴重な大学生活に意義あらしめるよう切望する次第である。所懐の一端を述べて挨拶とする。

第 2 号

橘会報

湛山学長 一首相に就任一

三十一日もおしつまつた頃、母校学長、石橋湛山氏は内閣総理大臣に就任のニコースが、吾々同窓生の耳を驚かした。かつて大蔵大臣の頃は、どんな人かわからず、驚にもとめなかつた氏であつたが、相つぐ政変を経て、瀧山内閣では通商産業大臣、又立正大学の学長になられ、身近にその任在を感じつゝある時であつた。

今さら、湛山首相の政策を云々

しても、それは各新聞が筆をそろえて報道した通りであるから割愛するとして、筆舌は創立十周年の時お目にかゝつた事がある、應力絶倫、文字通り、磊落、常に微笑を以て人に接する処、しかもびしつければ奮闘にも快く応対されていた。

又反対党の真のあり質向にも堂々論旨をまげずに説明され、日本の進路は至済の発展、産業の充実にあることを意々と説かれて居た。

七十才と云えば大抵老人の部に入り、活動はとも角、服つぽい服装をするのが普通だが、大臣の洋服たるや、ラクタイ色に赤の格子縞、グアルに赤靴、タイはエンジ色、



曰く、人間は何時も二十代であれと。

戦后、十二年、いや、もう戦后ではないと人は云うが、この際、若々しい首相学長を迎えたことは日本の為、立正大学の為、そして橘会の為、慶賀すべきこと、して、花を共にしたい。

尚、この樹を借用して、色々問題になつてゐる、「一子感涙」注宅難解、ついで

にベース・アップのご新内閣に御馳いして摘筆します。



橘会報 第2号 1957